第Ⅲ部
研究の総括







第１章　学校評価

１　はじめに

３か年の研究実践の成果や課題を学校評価（教員・全校生徒・保護者による自己評価）の結果から見取る。また，その際，評価項目によって全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果を参考にする。学校評価からの考察については，今年度７月に実施した教職員の自己評価と生徒アンケート，10月に実施した保護者アンケートをもとに行い，比較のために，本研究１年次である平成25年度のアンケート結果や全国・学力学習状況調査の結果も参照する。

アンケートの質問項目は，本校の教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」の具現化を図り，その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について具体的な評価指標についてそれぞれ評価するために設定した。その中から，本校の今年度の研究実践の有効性について考察できると考える質問項目を選び，その結果を以下にまとめる。

２　教職員・全校生徒・保護者による自己評価から

それぞれの評価の数値は，評価規準を４段階で設定してアンケート調査を行い，その結果を集計し，平均値を求めたものである。生徒および保護者のアンケートでは，４（そうだと思う），３（だいたいそうだと思う），２（あまりそうだと思わない），１（まったく思わない），０（分からない）と設定し，教員の自己評価では実施率または達成率で，４（80％以上），３（70％以上），２（60％以上），１（60％未満）と設定している。

(1)　意欲的な学習活動の推進について

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
①　基礎・基本を確実に定着させるために学習指導を行うことができたか。	3.1	3.1	3.1	A
②　基礎・基本を活用し，多面的・多角的に考え，表現する場（学びあい）を設定し，生徒の力を拡大させる手立てを工夫することができたか。	3.2	3.2	2.9	A
③　学ぶ楽しさ（探究心の高揚）を味わわせるために学習のねらいに応じた指導を工夫することができたか。	3.2	3.1	2.8	A
④　学びの振り返り（自己評価）を行い，生徒自らが「育つ・伸びる」指導改善に向けて工夫することができたか。	3.4		2.7	B

資料１　生徒・保護者・教員による自己評価（その１）

資料１を見ると，①の評価が生徒・保護者・教員すべてで3.1の高評価になっていることは，基礎・基本を持続可能な社会を形成する上で土台となる知識，概念や技能等，それらを自在に活用できる資質や能力と捉え直して研究実践を積み重ねてきたことによると考える。また，②，③の評価については，教員の自己評価からは，まだ改善すべきところがあることが伺える。しかし，生徒・保護者の評価を見ると３以上となっており，「育てる」から「育つ」への教育の質的転換を試みた本研究により，授業改善が効果的に行われていることが見て取れる。④の評価指標については，総合評価が他の指標よりも低くなっていることから，今後の研究実践の課題として学びの振り返りを重視した取組が必要であることを教員間で共通認識した。

(2)　主体的な生徒活動の推進について

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
⑤　学校行事等において生徒が自信と誇りをもち継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。	3.5		3.1	A
⑥　学校行事等において仲間と共にやり抜く場を設定し，自己実現に向けて切磋琢磨できるための手立てを工夫することができたか。	3.6	3.5	3.3	A

資料２　生徒・保護者・教員による自己評価（その２）

資料２を見ると，⑤，⑥の評価が非常に高い。各教科等で「きょうどう」の精神を発揮する学びを強く意識して進めてきた研究の成果が，学校行事等での取組にも表れていると思われる。そ

の結果，生徒に自信と誇りをもたせたり，仲間と共にやり抜くことができたりする活動になっていったのだと考える。

(3) 充実した道徳教育の推進について

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
⑦ 互いを認め合い，励まし合う仲間意識を高め，安心できる支持的風土のある集団づくり（学級・学年等）のための手立てを工夫することができたか。	3.7	3.4	2.8	A
⑧ 他者との学び，他者からの学びによる自己理解や他者理解を深めるための手立てを工夫することができたか。	3.4		2.8	A

資料３　生徒・保護者・教員による自己評価（その３）

資料３を見ると，⑦，⑧ともに，教員の評価は低いが，生徒，保護者の評価は高い。⑦は自尊感情の醸成に直接関係する評価指標であるので，教員側は深く掘り下げて評価していると考えられる。資料１の④についての教員の自己評価が低かったことを考えると，自分の成長を振り返らせる指導に改善の余地があるということだろう。生徒の評価が3.7であることから考えると，「きょうどう」の精神を発揮する学びで，生徒は自分のよさや成長を認知することを積み重ねているともいえる。⑧についても，生徒と教員の評価を比べると，「きょうどう」の精神を発揮する学びの形成途中のため，教員の評価がどうしても厳しくなってきたのだとも考えられる。

３　全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて

全国学力・学習状況調査の全国の結果と比較して本校の実態を捉えておきたい。全国学力・学習状況調査の質問紙調査と同じ質問で本校の全校生徒にもアンケート調査を行ったのが，次の**資料４**である。本校では，四つの選択肢に，０（分からない）の選択肢も加えて実施した。**資料４**の（　）内の数値は全国の生徒数の割合である。**資料４**を見るとどの質問についても肯定的に答えている生徒の割合が全国よりも高い。しかし，⑨については，全国との差があまり大きくない。自尊感情を醸成する手立てについては，さらに研究していく必要性があると分かる。

質問事項 （選択肢　１：そう思う　２：どちらかといえば，そう思う　３：どちらかといえば，そう思わない　４：そう思わない）０：その他	選択肢				
	1	2	3	4	0
⑨ 自分にはよいところがあると思いますか。	26.6 (26.3)	50.1 (41.8)	13.8 (22.2)	2.3 (3.2)	
⑩ ものごとを最後までやり遂げて，うれしかったことがありますか。	83.9 (72.5)	12.7 (21.6)	1.7 (4.4)	0.2 (1.4)	1.5
⑪ 難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦していますか。	40.8 (18.5)	46.3 (50.2)	9.6 (27.0)	1.7 (4.3)	1.7

１段目は本校，２段目は全国の生徒数の割合（%）

資料４　生徒アンケートの結果と全国学力・学習状況調査の全国の結果

４　おわりに

学校評価の結果について，研究のＰＤＣＡサイクルの中に取り込み研究実践に活かすことで，研究主題に迫ることができたのではないかと考える。

全国学力・学習状況調査の中に「学校に行くのは楽しいと思いますか」という質問がある。平成25年度の本校３年生は，78.6%が「そう思う」と答え，「まあまあそう思う」の17.6%を加えると96.2%が肯定的に答えていたが，「まったく思わない」と答えた生徒が1.9%（３人）いた。平成27年度の本校３年生は，４月の調査時には，95.5%が肯定的に答えるとともに「まったく思わない」と答えた生徒が一人もいない状況であった。さらに，学校評価の資料として７月に行った同じ質問に対するアンケート結果は，「そう思う」82.6%，「まあまあそう思う」16.8%，「あまり思わない」0.6%，「まったく思わない」0%であった。この結果を見るにつけ本研究がすべての生徒が伸びる学びを実現できたに違いないと確信する。今後も本研究で明らかになった課題を解決し，さらによりよい研究実践を積み上げていきたいと考える。

第2章　研究のまとめ

1　研究最終年次のまとめ

資料は，基本構想（P14）でも取り上げた本校生徒の実態調査（2015年6月と11月に実施）の分析である。

「自己」の視点からの集計結果　数値（%）の分布

対象／時期	評価						
	10～9	8～7	6～5	4	3	2	1
全校／6月	18	26	30	11	10	3	2
全校／11月	20	29	29	8	8	3	3
全　国	14	23	34	13	8	6	3

評価の数値が低いほど，注意が必要な状態であると考えられる。この「自己の視点」の評価が右に偏る（全体的に数値が低い）集団は，一般的に「ゆきづまりを感じている」恐れがあり，全体的に「無気力な感じ」がする。

「自己」の視点を構成する各要素　数値（%）の分布

要素	対象／時期	評価						
		10～9	8～7	6～5	4	3	2	1
①不安感	全校／6月	11	26	32	14	8	7	3
	全校／11月	20	25	28	11	9	4	3
	全国	14	23	34	13	8	6	3
②自己否定感	全校／6月	16	22	38	11	7	3	2
	全校／11月	18	27	34	10	6	3	2
	全国	11	24	39	12	7	5	2

要素	対象／時期	評価				
		5	4	3	2	1
③外向性	全校／6月	7	25	39	23	6
	全校／11月	7	30	37	23	5
	全国	8	26	37	23	7
④行動性	全校／6月	4	17	42	27	11
	全校／11月	5	19	39	28	9
	全国	8	23	40	22	7

※　①・②の項目については，数値が低いほど「不安感」や「自己否定感」が強く，③・④の項目については，数値が高いほど「外向的」で「行動性」が高いとされる。

資料　生徒の実態調査　「『生徒理解のための調査　Ｍｕｌｔｉ（マルチ）』（大阪心理出版）より」

この調査結果を見ると，6月から11月にかけて，①不安感　②自己否定感　③外向性　④行動性，のどの項目も評価が全体的に数値の高い方に推移している。このことから，次に示す「『きょうどう』の精神を発揮する学び」の創造に焦点を当てた今年度の研究実践が，「自らを活かす生徒の育成」，「すべての生徒が伸びる学び」という点に関して，一定の成果があったことと認められる。

（「きょうどう」の精神を発揮する学び）

【共同】目的を達成するために，自分や仲間の私事的なことを出さずに自分を活かす
【協同】目的を達成するために，他者とともに，みんなで力を合わせながら自分を活かす
【協働】全体の目的に応じて，与えられた役割を演じ切ることにより自分を活かす

以下は各教科領域で実践された「きょうどう」の精神を発揮する学びの具体（一部）についてまとめたものである。

	「きょうどう」の精神を発揮する学びの具体（一部）
共同	○　理解している生徒が理解が不十分な生徒に対して，納得するように工夫して説明する。 ○　理解が不十分な生徒が何とか理解しようという意識で，適宜質問をしながら理解にたどり着こうとする。 ○　集団で合意に至った提案については，ひとまずみんなでそれを精一杯実践してみて，そこで得た学びや改善案を共有する。
協同	○　課題に対する理由付の予想を出し合い，より精度の高いものに絞り込み，その理由を手がかりとして考察する。

	○　予想に基づいて追究する際の学習計画等の見通しを相談する。 ○　パフォーマンスに対して，互いの良かった点や改善点をアドバイスし合い，集団が協力してより完成度を高める。 ○　課題に対して，自他の理由や根拠の移動を明確にしながら，全員が納得できる最善解を導き出す。 ○　同じ視点で調べた生徒同士が各個人の追究成果を持ち寄り，より本質的な理解にたどり着く。
協働	○　観点や事項を分担して調べて，多様な情報を集める。 ○　立場に分かれたり視点をいくつか設けて話し合ったり，討論したりする。 ○　立場等で分担して追究した成果を持ち寄り，重ね合わせて課題解決の本質に迫ったり，学習のまとめをしたりする。 ○　各自の果たした役割が，全体としてどのような位置付けであったかを見渡し，各個人の学びの意味やつながりを見いだす。

これらの学びについて，一定の成果が得られたものの，前ページの実態調査において，現時点でも低い数値の生徒がいることは看過できないことである。これらの学びについて学習成果が十分に得られるようにするためには，どの「きょうどう」の精神で発揮する学びにおいても，そこで活用すべき知識や技能等を「すべての生徒に，活用できるように習得」させる教師の工夫が大切であり，また，「習得したものを，すべての生徒に確実に活用させる」指導の工夫を設定することが重要である。この観点から，各教科領域にて，例えば，自他の思考状況を見える化する手立てやホワイトボードなどの思考ツールの工夫充実が図られたが，今一度，ねらいと指導と評価を吟味し，さらに効果的な学習活動を創造していかなければならないことを切に感じている。

また，論理的思考力や表現力の育ちが伴っていない場合，他者と「きょうどう」して問題を発見したり，解決したりする学習活動を設定しても，その効果はさほど上がらないことも本研究実践を通して明確となった。近年，グローバル化や情報化が急速に進む中で，一人一人が自らの持つ力を発揮しながら，世界中の誰とでも協力して創造的に問題を解決する力が一層求められるようになっている。協力して創造的に問題を解決するためには，各個人が論理的に思考すること，及び，それを他者に的確に伝えることが必要不可欠である。つまり，こうした論理的思考力や表現力は，持続可能な社会の形成に向け，自らを活かすための基礎的な力であると言える。この点からも今後研究実践を積み重ね，「持続可能な社会の形成のために，自らを活かす」生徒の育成に資する教育活動を創造していかなければならないと考えている。

2　3年間の研究のまとめ

3年間の主な研究成果は以下の通りである。

研究年次	○ 研　究　方　法 ◎ 研　究　成　果
1年次	○　各教員が，研究主題を具現化し，研究テーマを設定する。一つの研究に対して，教育学部大学教員1名以上と共同研究を進める。
	◎　本校生徒の実態に応じた「自立」と「共生」の力とは何かを明確にした。 ◎　「自立」と「共生」の力を育む上で効果的な学習指導方法を明らかにした。
2年次	○　1年次の研究の成果と課題を集約し，学校全体としての研究の重点目標を決め，焦点化していく。これを基に，研究の深化を図る。 ○　各教科領域の研究テーマに対する評価を行い，研究をよりよいものにしていくとともに学校の研究主題に対する研究の評価内容や方法を検討する。

	◎　本校生徒の実態から「自立」と「共生」の力を育む上でさらに指導の効果を上げるための要素を明確にした。 ◎　「自立」と「共生」の力を育む上で有効な指導と評価について研究が進み，研究・実践におけるＰＤＣＡサイクルが充実した。
３年次	○　２年次の研究成果と課題を基に，さらに研究の深化・統合を図る。 ○　学校の研究主題に対する研究の評価を行う。
	◎　ＥＳＤの視点を踏まえた質の高い学習指導が各教科領域で実践された。 ◎　生徒の確かな育ちを保障する上で重要となる事柄を明らかにした。

３年間各教科領域で様々な学習指導の在り方について研究・実践を進めてきた結果，確かな生徒の育ちを見取ることができた。この一番のポイントは，研究が進むにつれ，各教科領域ともにＥＳＤの視点をより明確にし，なおかつ「『自立』と『共生』の力がすべての生徒に育つ」学習指導について，その精度を上げていったことにあると言える。「何をどうすることが本校生徒の資質・能力が育つことにつながるのか」，「すべての生徒が伸びるためにはこれでよいか」，「そもそも○○とは」，「○○は本当に育ったのか」など，「持続可能な社会を形成するために必要な『自立』と『共生』の力が育つ教育活動を展開するために」を常に意識し，そして生徒の育ちの姿にこだわってこの３年間研究を進めてきた。また，「何のための学習か」については，生徒にも分かりやすい言葉で各教科領域の学習活動ごとに語られてきた。教師，生徒ともに「何のためか」を理解した学習活動の重要性を，生徒の姿から再認識することもできた。

近年，次期学習指導要領の改訂に向けた議論においても，「育成すべき資質や能力の育成」やその手段としての「アクティブ・ラーニング」が話題に上がっている。このような状況の中で，課題は多く残っているものの，生徒の関わり合い・学び合いの充実を通して，次代のよりよい社会の形成に資する資質・能力の育成にこだわってきた本校の研究実践は有意味なものであると実感している。

３　今後の研究の方向性

例えば，「持続可能性」に目を向けた学習内容についての研究や「自立」と「共生」の力を一層効果的に育む学習指導方法，及び，評価の研究など，本年次までの研究をより深化させるという方向性が考えられる。例として，先述した，論理的思考力や表現力を学校全体で体系的に育むことなどが考えられよう。

教育研究実践は，繰り返し繰り返し実践を反復し，その反復の中に発見や再創造を創出しながらこそ初めてその成果が上がるものだと考える。したがって，今後の新たな主題のもとでの研究実践においても，本年次までの研究成果を生かすことが大切であろう。それとともに「これからの社会に必要な」という長期的な視点と「今，本校の生徒に必要な」という短期的な視点を併せもって研究を進めていくことが重要である。研究の内容そして方法ともに充実させ，「すべての生徒が確かに育つ魅力的な」学校であるべく研究・実践を進めていきたい。

お わ り に

３か年継続研究の最終年次，多くの皆様のおかげをもちまして，これまでの研究成果をこのような形で報告できますことに深く感謝申し上げます。

研究主題「持続可能な社会の形成に向け，自らを活かす生徒の育成～すべての生徒が伸びる学びの追求～」のもと，①「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換　②自尊感情を醸成する学びの積み重ね　③持続可能性を見据えた「自己―他者―社会」観が育つ教育活動の展開に取り組んできました。特に，各教科領域を中心に日々の地道な授業実践を大切にする中で，「自分を活かしきることのできる生徒」を着地点とした「きょうどう（共同，協同，協働）」の精神を発揮する学びの場を意図的に設けることで，生徒が自ら求めて育つ姿の具現化を図ってきました。授業において，「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」を学習内容と同様に捉え，指導方法の不断の見直しと生徒の学びを起点とした多様な取組に挑戦してきました。

このような実践研究の積み重ねの中で，疑問や課題に気付く力，計画を立てる力，多面的・総合的に考える力，コミュニケーションを行う力，他者と協力する態度，つながりを尊重する態度，進んで参加する態度等，生徒の主体的な学びの高まりを感じることができました。それは，持続可能な社会づくりのための担い手づくりの確かな手ごたえでもあります。さらに，生徒をリードする教師にも，ファシリテーション能力を高め，ファシリテーターとしての役割を担う意識が見られるようにもなってきました。これも，授業研究における指導案作成からまとめに至る過程で，研究パートナーである愛媛大学の先生方や附属学校園の先生方，公立学校の先生方の適切なご指導・ご助言の賜物といえます。

今夏，中央教育審議会教育課程企画特別部会では論点整理をまとめ，学習指導要領改訂の方向性を明らかにしました。その中で，「何を知っているか，何ができるか（個別の知識・技能）」「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力）」とともに「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」という学びに向かう力や人間性が重視されています。多様性や協働性，主体性など，情意・態度に関わるすべてを総合的に育てていくことが含まれています。どの生徒にも学びを保障し，一人一人の幸せな生活を自らが創り出すことのできる力を育んでいくことが求められています。

このことは，まさに本校が取り組んできた実践研究ともいえます。しかし，論点整理でも指摘しているように，本校においても次期学習指導要領に向けて，今後はさらに教科を越えた横断的な視点で，教育課程全体で生徒にどういった力を育むのか，生徒の具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要があります。関係各位におかれましては，本研究大会および本研究紀要の内容等に関して，研究を持続・発展させるうえで，忌憚のないご意見やご批正を賜りますようお願い申し上げます。

最後に，ご後援をいただきました愛媛県教育委員会，愛媛県市町教育委員会連合会，松山市教育委員会，愛媛県小中学校長会，愛媛県教育研究協議会をはじめ，ご指導・ご支援いただきました多くの先生方に衷心より感謝申し上げますとともに，今後とも本校教育の推進にご支援・ご協力をお願い申し上げます。

2016年２月

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　山　本　　恵

研究アドバイザー

愛媛大学教育学部　教授　平松　義樹

愛媛大学教育学部　教授　城戸　　茂

研究同人及び愛媛大学研究パートナー

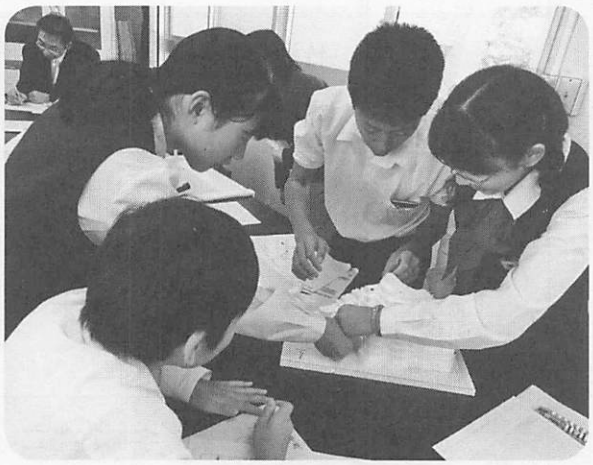
校　長　太田　佳光　　副校長　山本　　恵

教科領域	研　究　同　人	愛媛大学研究パートナー
国　　語	竹縄　隆子・大上　航太 武田　香織	三浦　和尚
社　　会	西田　剛志・田中　寿佳 宮本　真人	川岡　　勉・森　　貴子・矢澤　知行 張　　貴民・川瀬久美子・魁生由美子 松野尾　裕・霽　　卓三・鴛原　　進 福田　喜彦・中曽　久雄
数　　学	赤松　結美・宇都宮憲二 山本　泰久	河村　泰之
理　　科	岡本　慎次・辻井　　修 森山由香里	中村　依子・向　　平和・日詰　雅博 熊谷　隆至・大橋　淳史
音　　楽	来嶋　英生	井上　洋一
保健体育	坪内　道広・池内　裕紀	日野　克博・糸岡　夕里
技　　術	斧　　純司	森　慎之助・大西　義浩
家　　庭	大黒　智子	竹下　浩子
英　　語	河野　　操・河野　圭美	立松　大祐
行く河	濵田眞基子・山口　京子	日野　克博・富田　英司・上田　敏子









2015 愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集　第47号

平成28年２月

発行者　愛媛大学教育学部
〒790-8577　松山市文京町３番
TEL 089-927-9371
愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町１丁目５－22
TEL 089-913-7841　FAX 089-913-7842

印刷所　株式会社　松栄印刷所
〒790-0003　松山市三番町７丁目９－２
TEL 089-941-3334　FAX 089-933-7911

表紙作品：青葉写生会　絵画（水彩）青葉賞「春の講堂」　１年　瀬尾　実聖
中表紙作品：美術部作品　絵画（水彩）「自転車置き場」　２年　北村歩乃梨

